

恵庭岳滑降コース緑化復元から四〇年

― コース跡地の現状を見る ―

先 田 次 雄

自然公園財団支笏湖支部職員

はじめに

札幌冬季オリンピック恵庭岳滑降競技場との出会いは昭和四十二（一九六七）年五月、苫小牧東高校の山岳部員としてオコタンペ湖を挟んで西側に位置する漁岳（いざりだけ）（二二九メ）を目指した時だと思っている。

その前年、中学三年生の時初めてオコタンペ湖を訪れたが、オリンピックを意識させるものは何もなかった。当時、オコタンペ湖への道は、湖畔（現・支笏湖温泉）から船に乗って支笏湖グランドホテルのある奥潭（おくたん）（オコタン）湖岸まで行き、そこからオコタンペ川沿いにオコタンペ湖、そして漁岳を目指した。その時も、前年同様に川沿いの小道を登るはずだったのだが、立派な道が造成中で驚いた記憶がある。

それから高校を卒業するまでの毎年五月、この道を登って漁岳に向かった。そのたびに道路の整備が進み、南西斜面に滑降コースが浮かび上がっていた。雪のない時期のスキー場を眺めると、樹木が伐採された跡地であるゲレンデがまるで土砂崩れの跡のように見えるのと同じだった。

昭和四十七（一九七二）年の札幌冬季オリンピックは東京でテレビ観戦だったと思う。ほとんど記憶に残っていないが、滑降コースについてはテレビのアナウンサーがコース終盤の急斜面を「まるで湖に飛び込むようだ」

などと声を張り上げていたことが強く印象に残っている。

コース跡に踏み込んだのはオリンピックの翌年。その次が、会場跡地に放置された顕彰碑が話題になった昭和六十一（一九八六）年。

長野冬季オリンピックの滑降コースが問題となった平成八（一九九六）年にも登った。植樹されたアカエゾマツがまだ背丈ぐらいいだった。標高八〇〇付近で、黒い動物が走り去るのを見て一瞬仔グマかと緊張したが、エゾタヌキと分かって安心した思い出がある。この辺まで登れば切り立った山頂部がよく見えた。この年は二回登った。

平成二十三（二〇一一）年四月、思い立って丹鳴岳（になるだけ）（一〇四〇）に登った。天候が悪化して途中で引き返したが、標高九〇〇を越えたと北東方向に恵庭岳南西斜面のほぼ全体が見えた。この時季、この方向から眺めたのはほぼ二〇年ぶりだった。最初に目に入ったのは斜面下部に浮かび



写真1 丹鳴岳頂上直下から望む恵庭岳南西斜面
下部の交差する2本の帯が滑降コース跡地
(筆者撮影)

上がった二本の黒い帯だった。植えられた針葉樹が大きく立派に育っている姿だった。雪に覆われた斜面に走る針葉樹の黒い帯は、ここで滑降競技が開催された「記念すべき証し」だったが、どう見ても周囲との違和感が大きかった。

その年の秋、定年後の第二の職場で恵庭岳を毎日のように眺めるようになってから、マスコミの友人に頼

まれて一緒にコース跡地を登った。「札幌オリンピックから四〇年」のための取材が目的だった。筆者は、気になっていた「違和感」の現場を見てやるつもりだった。だが、準備不足で果たせず、翌年も一回。さらに平成二十五年には二回も登ってしまった。

植物や土木の専門家ではない筆者に森林復元の学術的な状況など分かるわけもないが、「違和感」の様子をしっかりと確認し、自分と滑降コースの関わりに一つの区切りをつけたかったのだと思う。

滑降コースの概要

恵庭岳は支笏湖の北岸に位置する標高一三三〇呎の円錐形で急峻な活火山。厚い溶岩と溶岩ドームに覆われているのが大きな特徴で、約二万年前の大規模な噴火による溶岩流の噴出で原型が形成された。二万年前から始まる活動は現代まで六期に分けられ、約二〇〇〇年前の第五期に山頂部から山体西麓で溶岩が流出し、オコタンペ川をせき止めてオコタンペ湖を誕生させた。この時期の山頂部から山麓部まで続く溶岩流の上に滑降コースが造成された。

植生は山麓部がハリギリ、ミズナラ、ホオノキ、ナナカマド、ダケカンバやミヤマハンノキなどの広葉樹が中心でエゾマツやトドマツは少ない。中腹に入るとエゾマツやトドマツが増えダケカンバを交えた混交林になる。山頂部ではダケカンバやミヤマハンノキが多く、ハイマツのほかミネヤナギやイワヒゲなどの高山植物も交じってくる。

恵庭岳滑降競技場の造成は昭和四十三（一九六八）年六月から始められオリンピック前年の四十六年十一月まで続いた。造成には六つのダイナマイトが使われ、爆破後にブルドーザーで整地が行われた。

完成した男子コースは標高三五四〜一二六呎、コース長二六三六呎、

平均斜度一七度、最大斜度三七度。女子コースは標高三三六〜八七〇呎、コース長二一〇八呎、平均斜度一四度、最大斜度三五度。幅は男女コース共に二〇〜六〇呎。

男女のコースの間に第一区間延長八八四呎、第二区間延長八三〇呎のロープウェイ二本、その上部に三三〇呎のチェアリフト一本が設けられた。伐開コースも含め用地は四三・四畝、森林伐採量は約二九〇〇立方呎、土工量は約六万五〇〇〇立方呎となっている。

立木伐採と整地は昭和四十三年から始まり、四十四年にはコース全域約二〇畝にホワイトクローバなどの牧草類が肥料、土壌改良材などとともに空中散布されている。

付帯施設はコース上からスタートロッジ、スタートハウス、中間ステーション、ヘリポート、山麓部には聖火台、運営本部、プレスセンター、宿舎、ヘリポート、駐車場など合わせて三八棟が建設されている。

緑化復元工事

オリンピック終了後、全日本スキー連盟などによるコースの存続運動もあり、撤去復元方針が決まりオリンピック組織委員会の復元計画案がまとまったのは四カ月を経た昭和四十七（一九七二）年六月になってからだった。

最大の課題は、伐開し荒廃したコースを緑化するための斜面の安定化だった。安定化のための擁壁など、どの程度の土木工作物が必要になるかということ、北大の東三郎教授（現・森林空間研究所主宰）などの指導を受けて、地上にあまり突出しない低構造の工作物を有機的に配置し、オリンピックで使用した施設の解体材、現地資材を活用した土留工としての緑化基礎工が計画された。

特に斜面上層の安定を図り崩落や雪崩の発生を防止するため男子コーススタート直下と男女コース、ゴール直前の急斜面には地表面に金網を張る面状基礎工。ゴール直前などの急斜面にはコンクリートブロックの埋設基礎工、砂よりも径の大きな石で水を通しやすい礫を用いた埋設排水溝である礫暗渠工、ヤナギ網柵工。比較的斜度の穏やかな場所には八〇度の間隔を置いて上部を開け放した明渠排水工などが計画された。ロープウェイ駅舎の基礎コンクリートは、斜面の浸食防止に有効と考えられて残置された。

緑化復元対象面積は三二・二ヘクタールで、その緑化復元といっても林相を元どおりに復元するのは事実上不可能なため「その近似値の森林を目指す」ことを目標にアカエゾマツ、トドマツ、ダケカンバ、イタヤカエデ、ナナカマド、ケヤマハンノキの苗を、「画一的にならないように植え込む」とした。本来植えるべきだったエゾマツは、関係者の談話などを読むと「入手できなかった」という。種子から直接苗木を育てることが難しかった当時の事情はあったのだろうが、国家的事業の後始末としては、ちよつとお粗末な気がするの筆者だけだろうか。入手難を口実に育てやすく成長が早いアカエゾマツを活用したと勘ぐりたくなる。

植栽密度は通常は一畝当たり二〇〇本だが、ここでは畝当たり三〇〇〇〜四〇〇〇本とし、植穴を不整形に配して各植穴には土壌改良材、肥料を混入した客土が行われた。標高七〇〇メートル以上ではポット苗が使われた。それ以下は普通苗を使い、一本植えのほか針葉樹と広葉樹、針葉樹のみ、広葉樹のみの束植えも行われた。束植えによって幼齢期の環境抵抗力を高めるとともに、優勢樹がより早く針広混交林になるよう期待したという。オリンピック終了後、施設の撤去、保全工事、緑化工事の大部分は昭和四十七、四十八年度に札幌オリンピック組織委員会が実施。四十九年に同

組織委員会解散した後の緑化復元は日本体育協会に引き継がれ、北海道がその委託を受けて行った。

植栽は昭和四十八年から開始され、施設跡地には草生工が行われ、六十一（一九八六）年までの一二年間に補植、下草刈り、野鼠駆除、追肥などの保育・管理事業が行われた。

工事が終わった翌年に日本体育協会の委託で林業土木コンサルタンツ北海道支所による状況調査が行われ『恵庭岳滑降競技場復元工事調査報告書（『最終報告書』）がまとめられた。『最終報告書』では「わが国唯一の森林復元の成功例」、「周辺との調和、同化は時間とともに解決される」と評価している。

『最終報告書』を受けて、関係者による終了確認会議が開かれ、平成元（一九八九）年、日本体育協会は苫小牧管林署に工事の終了届け出を行い、土地は国有林に戻された。

なお、施設の一部は仮設工作物の耐用年限内に限り野外自然教育施設への転用が認められ、奥潭地区の観光開発を目論んだ千歳市の支笏湖自然の村として昭和五十（一九七五）年六月に開村（開村期間六〜九月）したが、利用が伸びずに三年後の昭和五十三年に閉村した。この間の利用者は四九六二人だった。施設は翌年解体されている。

競技場跡地へ、平成二五（二〇一三）年十月

オリンピック会場跡地へ行くには、以前は道道支笏湖線からオコタンペ川を渡る橋があったが、すでに外されて残っているのは橋台だけになっている。この橋台が残されている最大の構造物だろう。現在は道道の通行止め地点からほとんど廃道といえるほど荒れた林道を登っていくしかない。

その林道を進むと恵庭岳の登山道になっている西沢コースへの分岐に



写真2 オコタンペ川に残る会場入口橋の橋台



写真3 斜面に設けられた土留め用コンクリートブロック擁壁
(標高400m付近)

突き当たる。余談になるが、滑降コースになった斜面より南側に位置する沢を西沢と呼び、その北側にある尾根（斜面）を南西斜面と呼ぶようになったことについては、いまだに不思議に思っている。

ともあれ、分岐を西側に進むと、チシマザサの生い茂った周囲の森とは様子はかなり違うダケカンバの林にでる。ここが男子コースのゴール地点。さらに進んで小さな尾根を回りこむとやはりダケカンバの林とその奥にアカエゾマツが見えるちよつとした広場にでる。ここが女子のゴール地点になる。男女のゴール付近はダケカンバを優占種とし、さらに林相が画一化しないよう植樹が行われたとされているが、とてもそうは思えない。

今回登ったのは女子ゴールからで、男女コースの合流点から男子コースに入った。以前に登った最初から男子コースと考えていたが、踏み分け道がはっきりしないため、標識がしっかり付いている女子コースを選んだ。

女子コースの西側にはコース最後の急斜面の上に出る作業道が作られている。その作業道に入ると周囲はアカエゾマツの植林地になっている。標高約三四〇㍎。陽光が差し込む作業道沿いには天然更新の高さ一㍎前後のトドマツの幼木が並んでいる。アカエゾマツの林内はフッキソウなどエゾシカの食べない種類ばかりが目についた。

作業道を離れしばらく進むと斜面がきつくなり、ゴール直前の急斜面に入る。標高三七〇㍎付近で最初の土留め用コンクリートブロック擁壁が出現した。標高四〇〇㍎を超えると斜面の露岩が増え、まるでガレ場といった雰囲気になる。斜面を横断するブロック擁壁の間隔が狭まり、露岩を固定する金網がコース全面に張られ、その金網を支えるために直径一㍎のワイヤーが縦横に張られていた。金網は錆びてはずたになつていたが、十分に機能を発揮してきたのだろう。露岩が崩れたり表土が流れた形跡はなかった。

土砂が溜り安定しているブロック擁壁のすぐ上は、植えられたダケカンバが比較的よく成長していた。ただし大きな岩が重なっているところでは根が十分に張れず育ちきれない細いダケカンバやケヤマハンノキがチシマザサに紛れていた。

標高五〇〇㍎で急斜面が終わり緩斜面に入る。男女のコースが交差するあたりで、植林幅は一〇〇㍎ぐらいありそうだ。植えられたダケカンバが一〇㍎以上に伸びている。その中を道標にしたがって進むが、まるでシラカバ並木を歩いているようだ。その周囲にアカエゾマツやトドマツが整然と並んでいた。コース外側の天然林からアオダモやドロヤナギが侵入していた。

オリンピック前年の昭和四十六（一九七二）年一月に同じ場所を撮った写真がある。苦小牧の泉田健一が仲間と「滑降コースを滑ってやろう」と



写真4 五輪開催前年の女子滑降コースとゴンドラ
(昭和46年1月18日撮影：泉田 健一)



写真5 生育が極端に悪い標高600m付近のアカエゾマツ林



写真6 草地となっているロープウェイ終点の広場



写真7 まとまって根返りしたアカエゾマツ

入り込んだ時に写したものだ。勇んでコースを登ったものの「ゴール手前の最大傾斜の斜面（壁）に来るときつくて滑るどころではなく斜滑降とキックターンで下りた」と振り返り、青い支笏湖に向かって滑り降りていくのが強く印象に残っているという。

筆者もオリンピックの翌年に同じ場所まで登った。スキーを滑るつもりではなく「コースを見てやろう」という野次馬的興味からだだった。天気が悪くて湖と山の絶景は拝めなかったが、オリンピックの雰囲気は楽しむことができた。

標高六〇〇[㊦]を超えると植栽されたアカエゾマツ、ダケカンバ、トドマツの生育度が落ちてくる。標高六五〇[㊦]あたりから土留めのブロック擁壁、金網が多数出現する。露岩地では周囲からのチシマザサの侵入も多い。ただし、斜面が平坦になったところでは直径三〇[㊦]を超えるとトドマツが並んでいた。

同時に、このあたりからトドマツやアカエゾマツの風倒木が目立つよう

になった。

葉が緑でまだ松脂臭が漂う直径三〇[㊦]もあるトドマツが数本まとまって倒れていた。直径二〇[㊦]クラスのアカエゾマツが十数本まとまって倒れているところもあった。いずれの根も浅く、根と表土がまるでカーペットのようにめくれ上がっていた。このサイズの風倒木がまとまってあったのは、この場所だけだったと思う。地形的要因で最近かなり強い風が吹き抜けたのかもしれない。

標高八〇〇[㊦]を超えると、植えられたアカエゾマツ、ナナカマド、ダケカンバの生育が極端に悪くなった。ダケカンバは細くともなんとか伸びているが、チシマザサに覆われ隠れてしまいそうなアカエゾマツはちよつとかわいそうだった。八二〇[㊦]で、今年と思われる腐った倒木につくられたアリの巣を壊したヒグマの痕跡を見つけた。

九二〇[㊦]でロープウェイ終点の女子スタート地点に出た。斜面を幅三〇[㊦]削って平らにした広場で、ハンノキ類が主に植えられたはずだが

草地になっていた。女子スタート側（北側）に直径三八センチの金属支柱が二本切断されて基礎とともに残っていた。男子コースの下を潜ったアーチ状の金属板をつないだトンネルもあり、中には廃材が投げ込まれていた。周囲には陶器の破片やトタン板、ワイヤーの固定金具などが半分以上埋まった状態で散らばっていた。

施設解体の従事者から「運びきれない資材は、近くの沢に投げ込んで始末した」との話を聞いたことがあり、北側の沢に下りてみたが、十分な時間もなく何も見つけることはできなかった。

標高一〇〇〇メートルを超え、男子スタート地点近くなると、風雪で枝や幹が横に伸びたいじけたダケカンバばかりが目につく。土留めに張られた金網はワイヤーではなく鉄パイプで固定されていた。周囲にはやはりいじけた樹高の低いナナカマド、ハイマツ、ヤナギなどがあつたが、植栽が自然侵入かの見分けは付かなかった。

驚いたのは、こんな場所にもエゾシカの新しい糞があつたことだ。周囲



写真8 投げ込まれた廃材が残るトンネルの上部



写真9 男子スタート地点付近の斜面

をよく見ると足跡もたくさんあつた。たしかに、ここに登ってくるまでの道にはペンキやテープなど多くの標識があつたものの道の実態はシカ道そのものだった。それにしても「ここまで登って来るなよ」と言いたくなる。肥料の袋や樹木の生育調査に使つたとのだろウプラスチックの標識杭など人間の残したのも案外多かつた。平成二十三（二〇一一）年秋にここまで来たときには、オリンピック時コース沿いに立てられた三角形の小旗を見つけ、今回もう一つと期待していたが見つけられなかった。

男子スタート地点まで行き着くと、斜面というより岩壁に立っているような気分になる。ここに足場を組んでスタートハウスを設置した関係者の苦勞が思い浮かぶ。振り返ると正面に真っ青な湖の西半分が見えた。急斜面を北側に回ると、葉を落としたダケカンバ越しにオコタンペ湖が目飛び込んできた。

最後に

「違和感」を感じたコース跡地を自分なりに歩いて、見た、その実感は単純なものだった。『最終報告書』でどのように「わが国唯一の森林復元の成功例」と評価していても、なんのことはないただの「造林地」ということだった。支笏湖周辺の天然林で感じる空気とは異質だった。

ともあれ、関係者の長年の努力で、本来あるべきでないアカエゾマツが植えられるなど伐採前と林相は違うものの、森林の再生が曲がりなりにも進んでいると思つた。同時に湖の対岸にある樽前山（一〇四一メートル）のことを考えてしまった。

樽前山が、その山麓を火砕流で最後に埋め尽くした元文四（一七三九）年の大噴火を起こしてから二七〇年余り。火砕流に埋まって消滅した山麓の樹木はやつと標高七〇〇メートル前後まで登ってきた。稜線まであと三〇〇メートル。

樽前山と恵庭岳を同列に考えることはできないが、恵庭岳のコース復元が始まってからわずか四〇年。『最終報告書』の「周辺との調和、同化は時間とともに解決される」とはいつたいつのことなのだろうか。新たな森になるには、まだまだとてつもなく長い年月が必要だろう。

話は変わるが、標高一〇〇〇付近に、リフト用なのか電柱用なのは分からないが切り倒された金属支柱が一本残されている。一息ついて座るにはちょうど良い太さの支柱には、赤いペンキで「お休み下さい」と書き込んであり、いつもここで一服する。長年にわたり植樹木の保育、管理にあたった人たちのささやかなご愛嬌なのだろう。いつもたばこをふかしながら「ありがとうございます」とお礼の言葉を忘れないようにしている。

(本稿掲載の滑降競技場跡地写真は平成二十五年十月筆者撮影である)

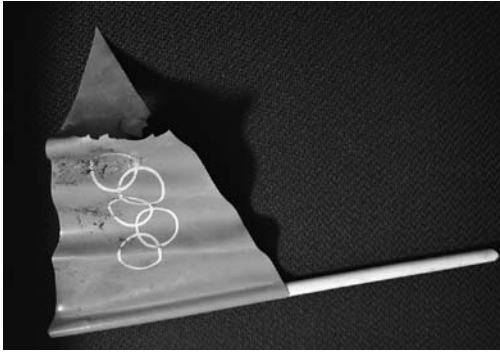


写真10 標高1,000m付近で見つけたコースに沿って並べられた小三角旗



写真11 赤ペンキで「お休み下さい」と書かれた金属支柱

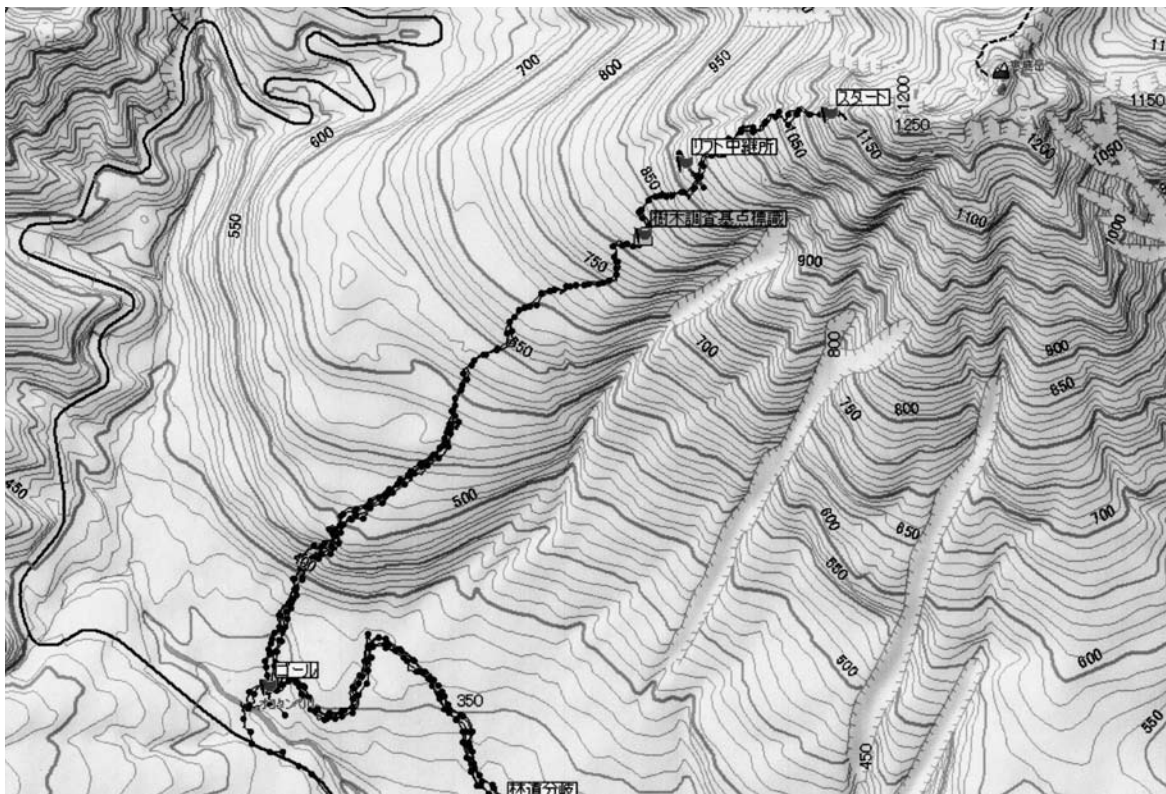
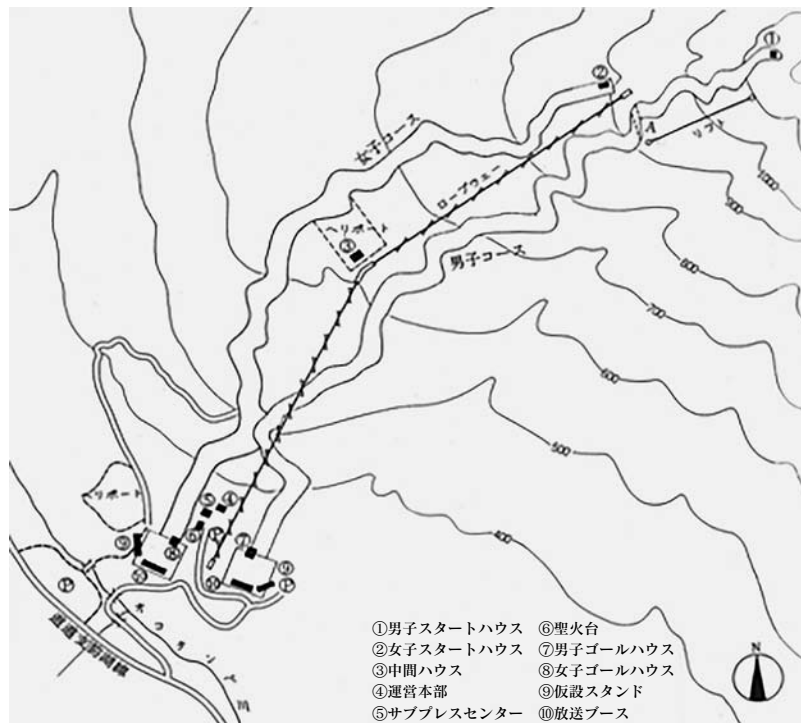


図1 全地球測位網(GPS)による恵庭岳女子滑降コース登山軌跡図

引用文献参考

- 千歳市『千歳市史』 昭和四十四年／『新千歳市史』 平成二十二年
 俵浩三『札幌オリンピック滑降コースの場合』 日本森林技術協会『林業技術』
 昭和五十二年八月号
 菊池俊一ほか『恵庭岳滑降コース跡地の植生復元』 日本林学会北海道支部論
 文集 平成六年
 北海道自然保護協会・これまでの行動2003 WEBサイト『恵庭岳滑降コー
 ス跡地復元を「従来の林相」へ導くため適切な管理の実施を求める要望
 書』 平成十五年九月
 若松幹男『支笏湖学のすすめ』 WEBサイト北海道地質調査業協会
 苫小牧市『苫小牧市史』 昭和五十一年
 8beat.com WEBサイト「オリンピック号(恵庭岳)」『失われたロープウェイ』
 平成二十一年
 高橋長助『国立公園支笏湖沿革史』 昭和四十七年
 美しい自然公園4『支笏湖』 自然公園財団 平成二十年
 『千歳民報』／『北海道新聞』／『毎日新聞』／『朝日新聞』／『北海タイム
 ス』
 協力
 守屋憲治／泉田健一／小西淳一ほか多くの関係者の皆さん

『志古津』第19号共通地図(Ⅱ)



図Ⅱ 恵庭岳滑降競技場
 組織委員会『第11回オリンピック冬季大会公式報告書』掲載図
 索道＝恵庭山麓駅 - (第1区間) - 恵庭中間駅 - (第2区間) - 恵庭頂上駅
 A＝恵庭頂上駅 - リフト間トンネル